

## 子育て中の「母親の学び」に関する一考察

——「子どもの遊び・体験」のための学習機会への志向性をめぐって——

柴田 彩千子\*

生活科学講座

(2018年9月21日受理)

### 1. はじめに

#### 1. 1 「子どもの遊び・体験」活動への関心の高まり

「子どもの遊び・体験」活動は、子どもが自然や事物、他者等と直に触れ合う活動を行うことにより、能動的に五感を使いつつ学ぶ取組みであり<sup>1)</sup>、周知のとおり子育ての環境を整備するに際して、「子どもの遊び・体験」活動を重視する認識は、従来から教育界の共通の認識である。

子どもの遊びに関しては、1961年に設立された子どもの遊ぶ権利のための国際協会（IPA）<sup>2)</sup>が、遊びは「栄養や健康や住まいや教育などが子どもの生活に欠かせないものであるのと同じように、子どもが生まれながらに持っている能力を伸ばすのに欠かせないもの」という認識の下、「国連子どもの権利条約」が採択される以前の1977年に「子どもの遊ぶ権利宣言」を提唱し、その中で子どもの遊びの特質を整理し<sup>3)</sup>、遊びは子どもにとって生きていくために必要なさまざまな能力を身に付ける営みであると宣言している。こうした遊びを通じて育まれる能力は、非認知的能力あるいは社会情緒的スキルと呼ばれるものであり、具体的には、事象に対する興味や関心を持つこと、自己主張や自己表現、他者との関係性（協調性や協働関係）の構築、自己抑制や粘り強さ等を育む力を総称して、「学びに向かう力」と呼称されるものである。現在多くの研究がこの非認知的能力の重要性を唱え、とりわけ幼児期のうちに育んだ非認知的能力が、その後の人生のその能力の獲得に大きく影響するため、人生の早期にこうした能力を培う取り組みが肝要であることを指摘している<sup>4)</sup>。

一方、こうした「子どもの遊び・体験」活動を重視する認識は、子どもを取り巻く法制度や答申にも反映されている。例えば、1999年、生涯学習審議会「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ—青少年の生きる力をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について（答申）」では、地域社会における子どもの体験活動の機会や遊び場の拡充等が提言され、その翌年2000年には教育改革国民会議が提出した「教育を変える17の提案」を受けて、2001年学校教育法に「小学校での社会奉仕体験活動の充実」、社会教育法に「青少年に対する社会奉仕体験活動の機会の提供」が盛り込まれた。翌2002年には中央教育審議会が「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申）」を出し、子どもを取り巻く大人たちが子どもの体験活動の機会を意識的に創出していくことが、子どもの「生きる力」を育むために、現代社会において重要な教育課題の一つとして掲げている。その後も子どもの体験活動についての提言は重ねられ、2007年中央教育審議会答申では、体験活動について「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」と定義された。さらに、2013年に出された中央教育審議会の「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」では、体験活動の定義について、2007年（答申）の内容を踏まえ、大きく3つに分類されている。一つ目は生活・文化体験活動（例えば放課後に行われる遊びやお手伝い、野遊び、スポーツ、部活動、地域や学校における年中行事）、二つ目は自然体験活動（例えば登山やキャンプ、ハイキング等といった

\* 東京学芸大学 生活科学講座 生活科学分野（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

野外活動、又は星空観察や動植物観察といった自然・環境に係る学習活動)、三つ目は社会体験活動(例えばボランティア活動や職場体験活動、インターンシップ)である。

同答申では、上述に挙げた体験活動を通じて子どもに「社会を生き抜く力」を育むために、「保護者自身も、乳幼児期からの多様な体験を通じて生活のために必要な習慣等を身に付けさせるなど、家庭教育の中で子どもの心身の発達を図るよう努め、更に日頃の家や地域での取組を広げていくという意識が重要である」と保護者の役割の重要性にも言及し、家庭・学校・地域の連携によってこうした体験活動の機会づくりが社会全体に広がることの重要性を述べている。昨今では、企業も「教育CSR」活動として、こうした子どもの体験活動の機会づくりに積極的に取り組んでいる様子が見て取れる<sup>5)</sup>。また、「子どもの遊び・体験」活動の重要性は、2017年に保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3法令が一斉改訂され、その中でも子どもの遊びを通じた非認知的能力の涵養が一層に位置づけられている。

## 1. 2 研究目的と研究方法

本研究の目的は、上述のような背景の下、家庭で実際に子どもを養育する保護者が、「子どもの遊び・体験」に関する自身の学習機会を、現実の状況に照らして実際にどのように志向しているかについて、東京学芸大学とベネッセコーポレーションとの共同研究「子育て中の母親および父親の学びに関する研究」<sup>6)</sup>として実施した、子育て中の母親を対象としたWEB調査から得られたデータを分析することによって、明らかにするものである。なお、このWEB調査そのものの目的は、子育て中の母親の求める学習機会全般の内容や形式について明らかにすることであるが、本稿ではその中でも「子どもの遊び・体験」に関する母親自身の学習機会の志向性について焦点を当てるものである。

## 2. WEB調査の概要

### 2. 1 WEB調査の枠組み

本調査は、共同研究先のベネッセコーポレーションが有するコミュニティ・サイト(ウイメンズパーク、<http://women.benesse.ne.jp>)の登録者を対象として、2018年3月上旬に実施したものである。有効サンプル数は600、そのうちパソコンによる回答は全体の約2割、スマートフォンによる回答は全体の約8割である。

### 2. 2 回答者の属性

本調査の回答者である子育て中の母親の属性をまとめると、以下のとおりである。まず、子どもの人数は、1人(妊娠中を含む)が約60%、2人が約30%、3人から5人以上が約9%であり、長子の年齢は図1のとおりである。

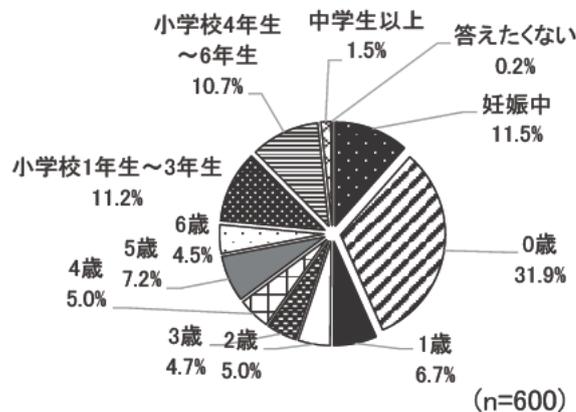


図1 長子の子どもの年齢

長子は乳児(0歳から1歳未満)が約30%と最も多く、妊娠中が約10%、1歳から6歳までの幼児が約25%、小学生が約20%であり、乳幼児が全体の6.5割を占める。妊娠中の母親の回答が1割強であることから、

出産前から本サイトで子育ての情報を収集する熱心な母親の姿が見て取れる。

なお、末子について、乳児が約22%、妊娠中が約11%、幼児が約55%、小学生が約13%であり、乳幼児が全体の約8割を占める。

回答者の年齢は、20代が約15%、30代が約63%、40代が約21%、50歳以上が約1%であった。図2のとおり、全体の8割が30歳から45歳までの者であり、10代の回答者は皆無である。

職業は、図3のとおり、専業主婦と有職者（産休・育休中が約24%、フルタイム勤務が約14%、時短勤務が約3%、パート・アルバイトが約12%、在宅・自営業が約2%）がそれぞれ半数ずつである。

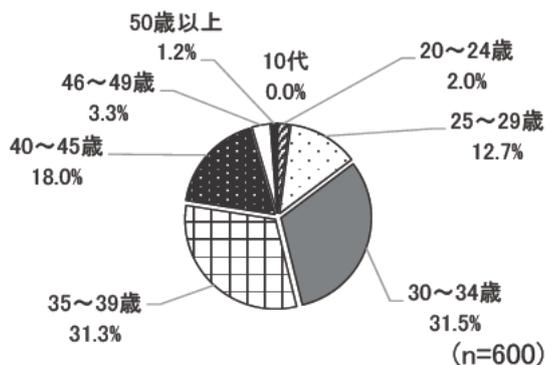


図2 年齢

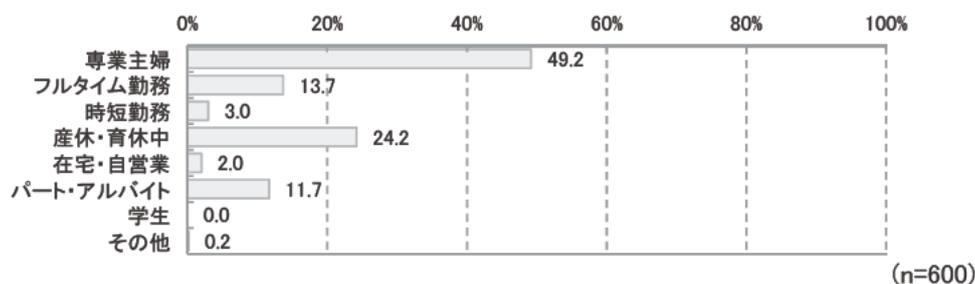


図3 職業

### 3. 子育て中の母親の「学び」の実態

#### 3. 1 妊娠中や産後の「学び」の内容

妊娠中や産後に学んでいることや学んだことについて問うたところ、「特にない」と回答した19.7%を除く8割以上の者が、何らかの学びを自覚的に実践している。

学びの内容については、「子どもの育て方（お世話，しつけ，生活習慣）」が最も多く約66%であった。次いで、「子どもの遊び・体験」が約43%、「子どもの教育（習い事，英語教育，受験）」と「生活スキル（料理，マネー，家事）」が約28%であり，上位3項目に子どもに関する内容が入っており，子どもに関する内容についての学びへの関心の高さがあきらかになった。その中でも，妊娠中や産後は，乳児を育てるための具体的なスキルを習得した者が多いことは容易く想像できるものの，子どもの遊び・体験に関する学びに関心を持ち実践した母親が4割以上という結果が，特筆されるべきことである。

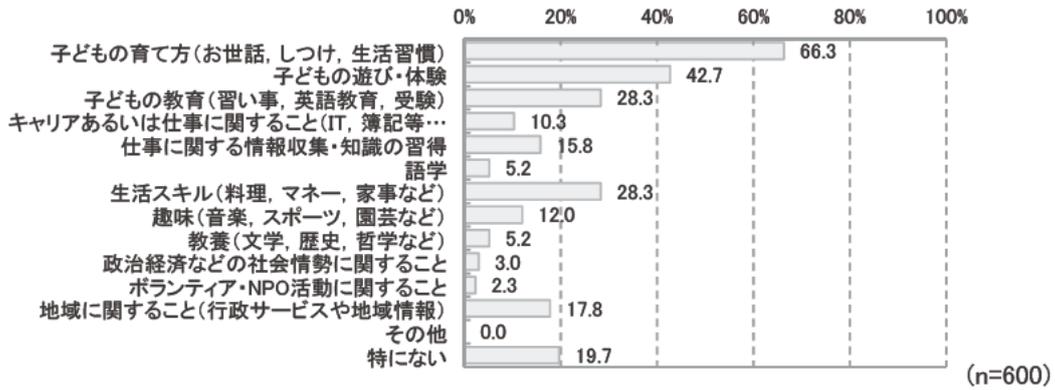


図4 妊娠中や産後の「学び」の内容 (複数回答)

子どもに関する内容の次に関心が高かったものは、前述の「生活スキル(料理, マネー, 家事)」, 次いで「地域に関する事(行政サービスや地域情報)」が約18%である。仕事に関する項目では、「仕事に関する情報収集・知識の習得」が約16%, 「キャリアあるいは仕事に関する事」が約10%であった。また、「趣味(音楽, スポーツ, 園芸など)」に関しては、約12%である。

### 3. 2 これから学びたい内容や参加してみたい学習機会

#### 3. 2. 1 これから学びたい内容

これから学びたいことを3項目まで問うた結果は、図5のとおりである。「子どもの育て方(お世話, しつけ, 生活習慣)」が約53%, 次いで「子どもの教育(習い事, 英語教育, 受験)」が約52%という結果である。子どもの年齢が上がっていくにつれて、「子どもの遊び・体験」35.8%よりも「子どもの教育」に学びの関心が移行していく様子が見て取れる。

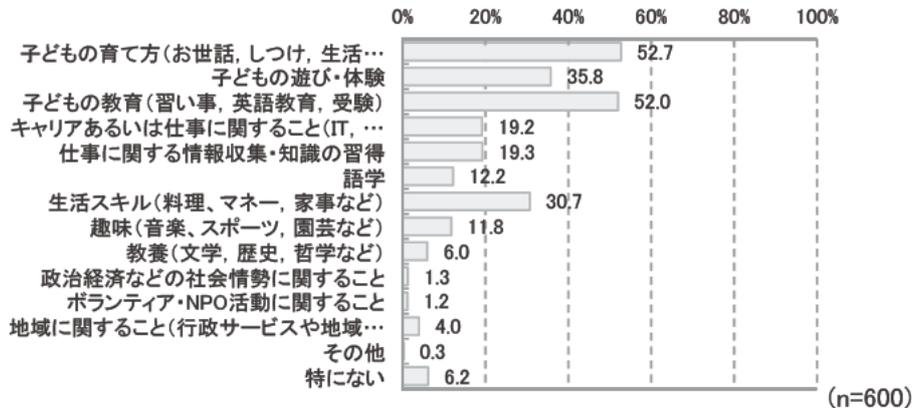


図5 これから学びたい内容 (複数回答)

#### 3. 2. 2 これから参加してみたい講座やイベント

上述(図5)の設問に、子どもに関する内容(「子どもの育て方」, 「子どもの遊び・体験」, 「子どもの教育」)と回答した464名に対して、具体的に参加してみたい講座やイベントについて3項目まで問うたものの結果は、次の図6のとおりである。

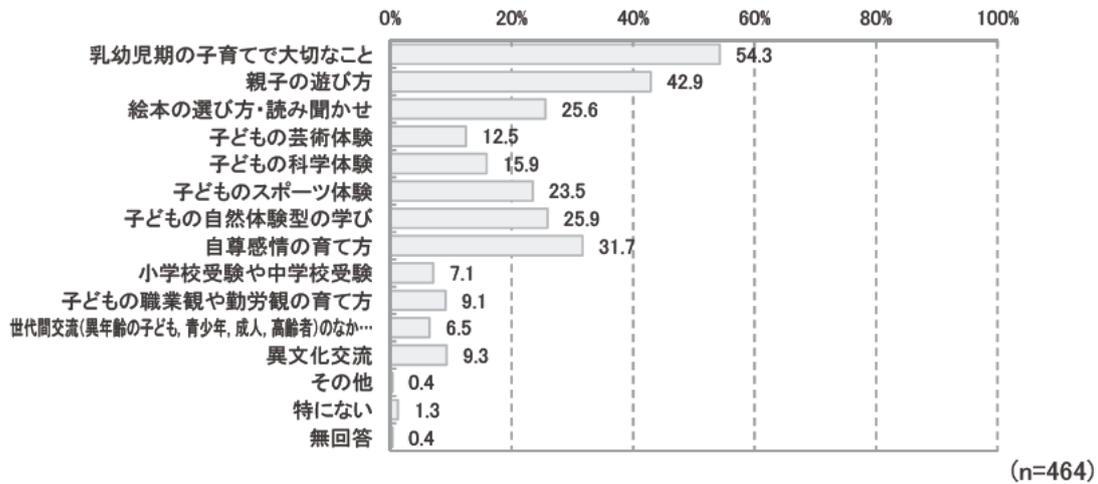


図6 これから参加してみたい講座やイベント (複数回答)

最も関心が高かった項目は「乳幼児の子育てで大切なこと」で約54%であった。「子育てで大切なこと」というやや漠然とした文言のこの項目について、長子の年齢とのクロス集計を行ったところ、まだ子育てについての具体的な経験の浅い妊娠中の母親や0歳児の母親の大多数が回答していることがわかった。

次いで、回答率の高い順に「親子の遊び方」が約43%、「自尊感情の育て方」が約32%、「子どもの自然体験型の学び」、「絵本の選び方・読み聞かせ」が約26%、「子どものスポーツ体験」が約24%、「子どもの科学体験」が約16%、「子どもの芸術体験」が約13%であった。その他の項目では「異文化交流」、「子どもの職業観や勤労観の育て方」が約9%、「小学校受験や中学校受験」、「世代間交流（異年齢の子ども、青少年、成人、高齢者）の中での学び」が約7%であった。

ここで、特筆すべきこととして、子どもの非認知的能力の大きな要素を成す自尊感情・自己肯定感の育て方に関心を有する者が3割強であることと、「子どもの受験」より人生の先にある労働市場への参入についての課題意識を有し、「子どもの職業観や勤労観の育て方」に関心を有する者が多いということである。

### 3. 3 「子どもの遊び・体験」に関する学習機会への志向性

本節では、子育て中の母親による「子どもの遊び・体験」に関する学習機会への志向性を浮き彫りにするため、上述の「3. 2. 1 これから学びたい内容」について「子どもの遊び・体験」と回答した35.8% (215名)の者を抽出し、「子どもの遊び・体験」について①どのような人に学びたいか、②どのような人と学びたいか、③どのような時間帯に学びたいか、④どのような学習スタイルで学びたいか、という4項目についての回答結果を見ていくこととする。

#### 3. 3. 1 どんな人に学びたいか

「子どもの遊び・体験」に関する学習機会に関心のある母親は、「専門家や研究者」に学びたいとする者が約8割、次いで「先輩パパママ」に学びたい者が約6割であり、「親や祖母」という身近な子育て経験者から学びたいと回答した者は、「先輩ビジネスパーソン」を下回り、わずか1割強であった。この結果より、母親たちは一世代前の子育ての知恵や経験の世代間継承を望むというよりは、現時点の専門的な知識や技術、研究データに基づく情報を求めている傾向が強いことが明らかとなった。

このような回答結果の傾向は、全体の回答結果と概ね同様である。現在の子育て中の母親は、専門家や研究者あるいはその分野の第一人者から知識や技術等を獲得すること、さらには、子育てに関して自分より少し先を歩んでいる先輩保護者から子育て経験に基づく実践的な知見を欲していることが窺える。

n = 215

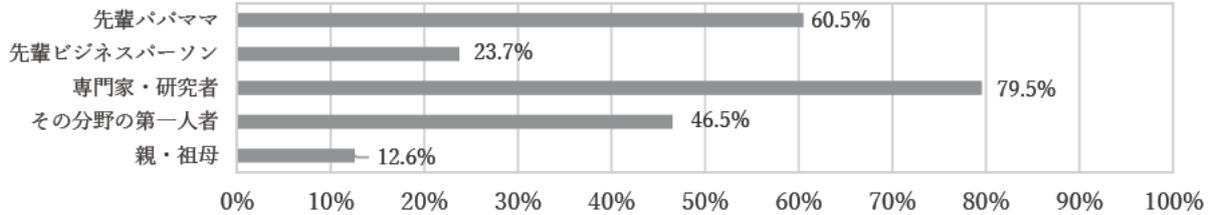


図7 どんな人に学びたいか (複数回答)

### 3. 3. 2 どんな人と学びたいか

「子どもの遊び・体験」に関する学習機会に関心のある母親は、「夫やパートナー」と学びたいとする者が約8割弱で最も多く、全体の回答結果では「夫やパートナー」と学びたい者の割合が最も多いことには変わりないが、約5割(49%)であったことと比較すると30%も高いことが明らかである。子育てを協働する夫やパートナーと共に、我が子について学びたいという志向は必然であろう。次いで「子どもが同じくらいの年齢の親」と学びたいが約6割、「ママ友」が約4割弱であった。いずれも、我が子と同様の発達段階にある子どもを持つ保護者とともに学びたいという志向性が浮き彫りとなった。

また、「ひとり」で学びたい者が約17%であるが、全体の回答結果(33%)と比較すると16%も低い結果となっている。

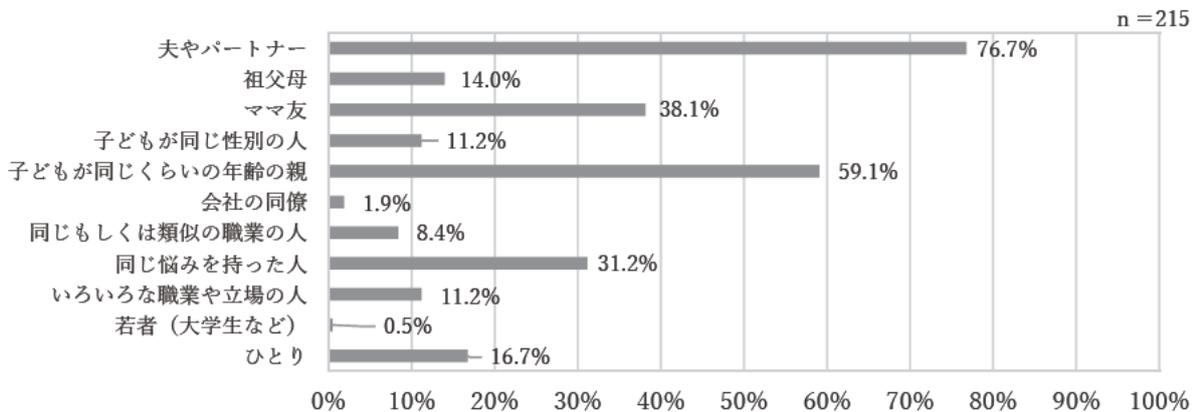


図8 どんな人と学びたいか (複数回答)

### 3. 3. 3 どのような時間帯に学びたいか

「子どもの遊び・体験」に関する学習機会に関心のある母親は、「平日の午前」が最も多く、次いで「平日の午後(13～16時)」という結果であることは、全体の傾向と同様である。ただ、全体の傾向と比較すると、「土日など休日の午前」が全体が約26%であったのに対して32%と5%高く、また、「土日など休日の午後(13～16時)」については全体が19%であったのに対して、約29%と10%も高い結果となっている。「子どもの遊び・体験」に関する学びは、上述の通り、夫やパートナーと共に学びたいとする母親が多いことより、平日に限定せず休日に学びたいとする者の割合が高くなっている様子が見て取れる。なお、平日、休日いずれも、午後16時以降の時間帯は回答者が少なく、夕方以降に学ぶための時間を確保することが難しいことが判明した。

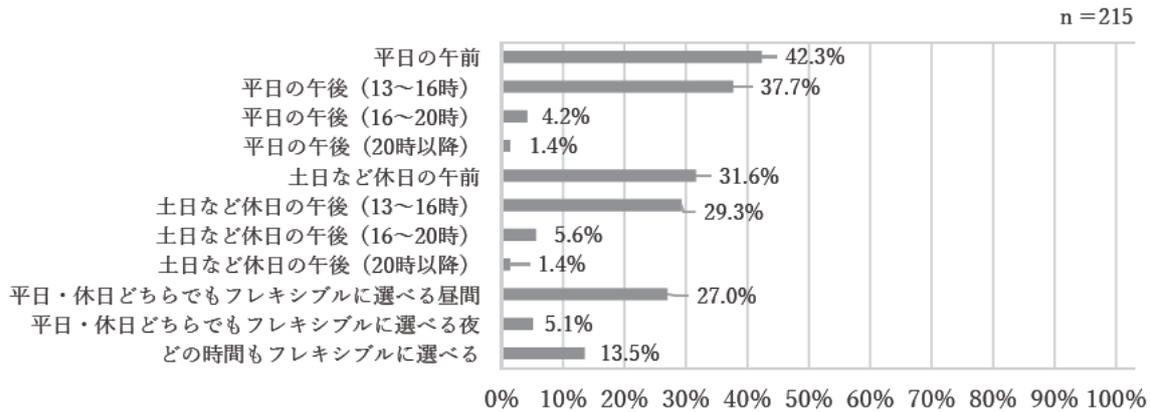


図9 どのような時間帯に学びたいか (複数回答)

### 3. 3. 4 どのような学習スタイルで学びたいか

「子どもの遊び・体験」に関する学習機会に関心のある母親は、「場が集まって受講する共同学習」を志向する者が最も多く、約74%であった。このように「場が集まって受講する共同学習」を志向する者が最も多いという結果は、全体の回答結果と同様であるが、全体の回答結果が約63%と比較すると、10%以上も高い割合を示している。

また、「1回の単発講座」が理想であるとする者が約48%であり、これも全体の回答結果と同様の傾向を示している。

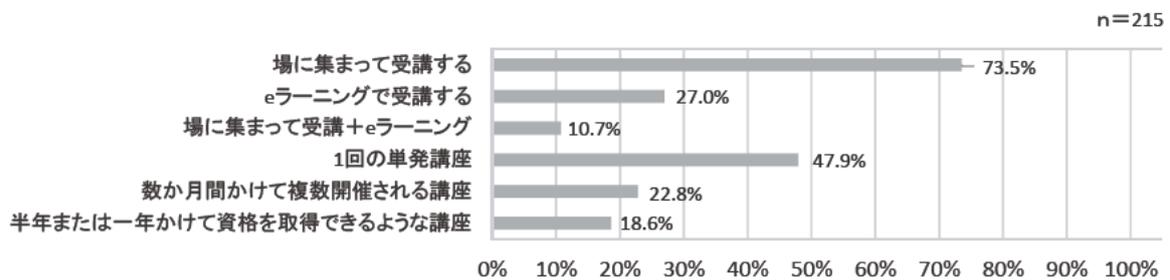


図10 どのような学習スタイルで学びたいか (複数回答)

## 4. おわりに～子育て中の母親の状況に応じた「子どもの遊び・体験」に関する学びの機会づくりに際して～

子どもの非認知的能力の醸成が課題となる社会的背景の下、本調査の結果から、「子どもの遊び・体験」活動についての学習機会を求める子育て中の母親が一定数存在し、こうした母親たちの志向する学習機会とは概ね次のようなものであることが明らかとなった。

まず、現在子育て中の母親は、世代間の子育ての知恵や技術の継承というよりは、専門家や研究者あるいはその分野の第一人者からの知識や技術等の獲得を求める傾向があり、さらには、子育てに関して自分より少し先を歩んでいる先輩保護者からの実践的な助言を必要としている。さらには、単独で学習機会に参加するのではなく、夫やパートナーと一緒に学習機会に参加したいと考える者が多く、このことは子育てや家庭教育は女性ばかりが担うものという旧来の固定的な性別役割分担意識を持つ者が減少していることを現している。夫やパートナーと共に学習機会に参加するためには、それが可能となる「土日など休日の午前～16時」に開催される学習機会へのニーズが高く、学習中は子どもの居場所が確保されることが求められる。加えて、学習スタイルに関しては、じっくり回数や時間を重ねて学びを深めていくものではなく、「1回の単発講座」を志向していることが浮き彫りとなった。

こうした学習スタイルは、従来の公民館等の社会教育施設で開催される女性学級講座（男女共同参画講座）の学習スタイルとは異なったものである。従来の女性学級講座（男女共同参画講座）は、単発の講座というよりはむしろ一定期間にわたり回数を重ね、時間をかけて学びを深めていくものである。このように一定の期間をかけた学習スタイルは、学習者同士の仲間づくりが進んだり、学習者の意識変容が促されたりするような長所があるものの、本調査の対象者である子育て中の母親の多くが志向する学習スタイルは、あくまでも「1回の単発講座」であった。その要因について、本調査の回答者の半数以上が有職者であるため「自由な時間」に制限があることと、自由記述回答結果から得られたデータより、やはり回答者たちが「自由な時間」の捻出に苦慮している様子が見て取れたことが挙げられる。

この自由記述による設問は、「子どもが生まれてから、仕事や生活や自分自身のことについて葛藤を感じたことはどんなことですか」と、「子育てを通して、自分自身が成長したと思うことはどんなことですか」の2問である。

前者の設問について、600名中300名が葛藤を感じていると記述した。そのうち、109名が回答者自身の「自由な時間」の確保が困難な状況に対して、葛藤を抱えていた。たとえば、「自分の自由な時間は細切れの短時間しかありません」、「このまま家事や子育てで、自分の人生が終わってしまうのではないかという不安」、「子どもが生まれたばかりのころは、自分の時間が全然取れなくて社会から遅れてしまったみたいで焦りを感じました」等の回答が見られる。

後者の設問の「自分自身が成長したと思うこと」については、例えば「子どもが寝ている間にどうしたら短い間で家事をこなせるかなど時間管理が以前より上手くなった」、「時間を大切にできるようになった」等、やはりここでも「時間の使い方」に関する記述が見られている。また、「忍耐、辛抱、我慢強さ」というワードを用いて回答した者が、例えば「自分を後回しにすることで忍耐力が付いた気がする」、「自己中心的なことが減った、我慢ができるようになった」等、この設問に回答した250名中60名見られた。

こうした自由記述による設問の回答結果より、子育て中の母親の課題として、自分自身が学ぶための自由な時間の捻出が課題であることが一層色濃く映し出され、彼女たちが「子どもの遊び・体験」活動に関する学びをはじめ、自分自身の学習スタイルとして「1回の単発講座」を望んでいることの背景の一端が見えてきたようである<sup>7)</sup>。

最後に、子育て中の母親が生き生きと学びながら子育てを楽しむことができるような支援の体系を構築していくに際して、本研究から得られた今後の課題は、次の通りである。上述に整理したような子育て中の母親が求める集団学習や共同学習の機会を企図し、子育て中の母親がこうした学習機会に参加し、学ぶ営為を通じて、「子どもの遊び・体験」活動が家庭教育に広がるような仕組みを構築する手立てを検討することと、母親が自分自身の学びの時間を有することで、子育て中の母親の抱える葛藤が少しでも解消するような学習プログラムを吟味することをあげたい。

## 謝 辞

本研究は、JSPS 科研費、JP18K02359の助成を受けたものです。

## 注・引用文献

- 1) 本稿では、子どもの体験活動について、2013年に出された中央教育審議会「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」による考え方（「意図的かどうかを問わず、直接自然や人・社会等とかわる活動を行うことにより、五感を通じて何かを感じ、学ぶ取組を広く包含している」もの）を踏襲している。
- 2) 1961年設立当初は「国際遊び場協会（International Playground Association）」という呼称であったが、その後「子どもの基本的人権」として「遊ぶ権利」を促進するために現在の名称（International Play Association）に変更している。
- 3) 遊びの特性を6つに分類し、子どもの発達過程に不可欠なものであると詳述している。子どもの権利条約総合研究所編『子どもの権利研究 第10号』日本評論社、2007年。
- 4) 例えば、非認知的能力や社会情緒的スキルに関する代表的な研究に、ヘックマン（Heckman）による「ペリー就学前プロ

## 柴田: 子育て中の「母親の学び」に関する一考察

ジェクト」(1960年代からアメリカのミシガン州で実施されている調査)をはじめ、OECDによる研究(OECD. Skills for social progress: The power of social and emotional skills.2015.)等、日本においても国立教育政策研究所による研究(国立教育政策所編『非認知的(社会情緒的)能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書』2017年。)等がある。

- 5) 企業が「教育CSR」として実施する社会貢献活動は、子どもの多様な体験活動を提供するうえで有意義であることから、文部科学省は2013年度より「青少年の体験活動推進企業表彰」を実施している。
- 6) 東京学芸大学・ベネッセコーポレーションによる共同研究「子育て中の母親および父親の学びに関する研究」(研究代表: 柴田彩千子, 研究期間: 2017年9月~2018年9月)は、子育て中の母親・父親および子どもに、産学連携でつくる「学び」の機会を提供し、そこから得られたデータを基に、上記の参加者にとって、これからの時代を生き抜くための「学び」とは何かを生涯教育の視点から捉え、その支援の体系を構築していくための分析を行うものである。具体的には、①子育て中の母親および父親の「学び」のニーズを、学習機会(「ママtomoパパtomoカレッジ」)において、質的調査として明らかにし、②株式会社ベネッセコーポレーションの有するコミュニティ・サイトの登録者を対象とした量的調査によって、子育て中の母親の求める「学び」の内容や形式について明らかにするものである。
- 7) データの詳細は、『子育て中の母親の学びに関する研究報告書』東京学芸大学生涯学習研究室, 2018年。)に掲載。

# 子育て中の「母親の学び」に関する一考察

——「子どもの遊び・体験」のための学習機会への志向性をめぐって——

## A study on “mothers’ learning” while raising children:

On their Orientation to Learning Opportunities for “Children’s Play and Experience” Activities

柴 田 彩千子\*

Sachiko SHIBATA

生活科学講座

### Abstract

Abilities developed through “children’s play and experience” activities include non-cognitive skills, social emotional skills and “ikiru chikara.” Currently, many studies support the importance of non-cognitive skills. Moreover, as non-cognitive skills fostered during one’s early childhood have a great impact on the acquisition of such skills in later life, the studies suggest it is vital to help nurture those skills in a person’s early stage of life.

This study aims to find out how child-rearing guardians at home generally feel about their own opportunities to learn about “children’s play and experiences” in comparison with their current circumstances. A survey targeting child-rearing mothers has been conducted jointly by Tokyo Gakugei University and Benesse Corporation under the title “A Study on learning by mothers and fathers in child care” and the results of the on-line survey have been examined.

The study has revealed that a certain number of mothers in child care seek opportunities to learn about “children’s play and experience” activities, and has found that those mothers generally wish for the following learning opportunities. First of all, child-rearing mothers tend to seek expertise and techniques from child-rearing experts, researchers or authorities in the relevant field rather than taking over knowledge and skills passed down from older generations. Furthermore, they need to receive practical advice on child rearing from other guardians who are a little bit ahead with more experience. Also more of them wish to participate in learning opportunities with their husbands or partners rather than taking part by themselves, indicating that fewer mothers now believe that women are solely responsible for child-rearing and home education, a traditional and fixed notion of division of gender roles. In order for them to join such study events with their husbands or partners, there is a high demand for sessions scheduled for morning and afternoon hours until 16:00 on Saturdays, Sundays and holidays. Baby-sitting services are also necessary for the children while their mothers are attending the sessions. In addition, the study has brought to light that those mothers are keen to participate in one-time courses rather than deepening their learning over a period in series of lessons.

The respondents’ comments have indicated that many mothers feel distressed about the loss of their own time after giving births. This study has shown tips on how to build a support system in the future that will enable child-rearing mothers to actively learn while enjoying child care. It is advisable to organize group study and collective learning occasions as was discussed in this study so that those mothers can take part and in turn their learning will help promote “children’s play and

---

\* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

experience” activities in home education. This will also allow the mothers to have their own time for learning, eventually helping ease their inner struggles. Coming up with such study programs is greatly desired.

**Keywords:** mother's life long learning, children's play and experience

*Department of Human Life Studies, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 「子どもの遊び・体験」活動を通じて育まれる能力として、非認知的能力あるいは社会情緒的スキル、「生きる力」等がある。現在、多くの研究がこの非認知的能力の重要性を唱え、とりわけ幼児期のうちに育んだ非認知的能力が、その後の人生のその能力の獲得に大きく影響するため、人生の早期にこうした能力を培う取り組みが肝要であることを指摘している。

本研究の目的は、家庭で実際に子どもを養育する保護者が、「子どもの遊び・体験」に関する自身の学習機会を、現実の状況に照らして実際にどのように志向しているかについて、東京学芸大学とベネッセコーポレーションとの共同研究「子育て中の母親および父親の学びに関する研究」として実施した、子育て中の母親を対象としたWEB調査から得られたデータを分析することによって、明らかにするものである。

本調査の結果から、「子どもの遊び・体験」活動についての学習機会を求める子育て中の母親が一定数存在し、こうした母親たちの志向する学習機会とは概ね次のようなものであることが明らかとなった。まず、現在子育て中の母親は、世代間の子育ての知恵や技術の継承というよりは、専門家や研究者あるいはその分野の第一人者からの知識や技術等の獲得を求める傾向があり、さらには、子育てに関して自分より少し先を歩んでいる先輩保護者からの実践的な助言を必要としている。さらには、単独で学習機会に参加するのではなく、夫やパートナーと一緒に学習機会に参加したいと考える者が多く、このことは子育てや家庭教育は女性ばかりが担うものという旧来の固定的な性別役割分担意識を持つ者が減少していることを現している。夫やパートナーと共に学習機会に参加するためには、それが可能となる「土日など休日の午前～16時）」に開催される学習機会へのニーズが高く、学習中は子どもの居場所が確保されることが求められる。加えて、学習スタイルに関しては、じっくり回数や時間を重ねて学びを深めていくものではなく、「1回の単発講座」を志向していることが浮き彫りとなった。

自由記述回答の結果から、多くの母親たちが、出産後に自分自身のための時間を喪失していることに苦悩している様子があきらかになった。今後、子育て中の母親が生き生きと学びながら子育てを楽しむことができるような支援の体系を構築していくに際して、本研究から得られた知見として、本稿に整理したような集団学習や共同学習の機会を企図し、子育て中の母親がこうした学習機会に参加し、学ぶ営為を通じて、「子どもの遊び・体験」活動が家庭教育に広がり、ひいては母親が自分自身の学びの時間を有することで、子育て中の母親の抱える葛藤が解消する手立てとなるような学習プログラムが検討されることが求められる。

**キーワード:** 子育て中の母親の生涯学習, 子どもの遊び・体験